



JSPS LONDON



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター

2010年10～12月 ニュースレター（活動報告）

大学の交流施設

平松 幸三
ロンドン研究連絡センター長

日英の大学を比べて気づく違いのひとつに、イギリスでは学生や教職員の交流を促す施設が豊富にあるという点である。日本の場合、研究と教育、とりわけ研究に資源を集中する傾向にある一方、イギリスでは大学生活のアメニティを高めるためにも投資がなされる。もちろんこれは相対的な話であって、イギリス以上に大学内のアメニティの充実に力を入れている国があるかもしれないし、私が知らないだけで、日本国内にもイギリスに負けていない大学があるかもしれないが、概して日本では研究と教育以外に力を注ぐことが余計なこと、極端に言うともダ、とみなされる傾向にある。と言うと、いやそれは日本の大学はスペースが足りないからだ、と言われそうだが、必ずしもそうは思わない。確かに敷地面積としてはイギリスは圧倒的に有利だが、イギリスの教授の研究室は日本に比べて広いわけではないし、予算状況の厳しいことは日本以上かもしれない。でもイギリスの大学は、交流施設を作る。

では具体的にどうなのか。私はまず図書館を挙げたい。図書館が交流施設かと言われると、ちょっと首をかしげられてしまうが、イギリスの大学では、午後4時をすぎると図書館

が学生でいっぱいになり、彼らが話すことのできる部屋が設けられている。もちろんその代わりに静穏が特に求められる部屋も設けてある。図書館が学生であふれるのは、彼らが図書館で勉強するからだ、理由は教科書が図書館にあるから。つまり大学は、授業で使う教科書を一定冊数購入し、数時間限定の貸し出しに指定する。学生はそれを使うために図書館に行くのである。日本の大学でも図書館で勉強している人は少なくないが、たとえば司法試験の受験勉強をしている人は、図書館の読書スペースを利用しているのであって、必ずしも図書館内の書籍を利用しなければならないわけではないだろう。イギリスの大学図書館は結果として、日本に比べて大きくなり、充実しているから、ますますよく使われることとなる。実際この国の学術を底で支えているのが、充実した図書館であることは実感する。研究や教育に直接的な貢献はあるように見えないが、経験するとやはりうらやましくなってしまうのだ。

次は、学生の交流施設について語ろう。例えば、先日訪問したヨーク大学は、約50年前に設立された、比較的新しい大学で、いま敷地面積を倍増して新キャンパスを建造中だが、まずキャンパスのランドスケープ・デザインから手がけた。小高い丘を作り、池を掘って白鳥を浮かべる。教職員にとっては働く場として、一部の学生にとっては生活の場として、景観が好ましいように図られている。キャンパスは100年単位で残る、それくらいのことをしないと。ヨーク大学は、

市の中心部からバスで10分ほどに位置していて、決して周りから隔絶しているのではないが、周辺に食堂はない。学食はカフェテリア式で、どうと言うことはないとは言え、4階分の吹き抜けにテーブルが並べられているために雰囲気は豪華に感じられる。それと学内のそこかしこ、廊下の端にスナック・飲料の自販機とテーブル・椅子がおいてあるのが印象に残った。ともかく、簡単な食事をしたり、お茶を飲んでだべったりする空間がちょこっと作られているのだ。また、教職員用と学生用とで分かれてはいるが、バーがある。イギリスのパブは、日本の居酒屋とは違い、さまざまな機能もっている社交場だが、大学にも当然のようにバーがある。パブと同じで、サンドイッチやスパゲッティなどを出しているの、昼食時には食堂を兼ね、5時以降には人がくつろぎ、交流する場である。必ずしも、飲み屋ではなく、要するに社交の場なのだ。ここでまったく違う分野の人と知り合い、しかし互いに知的な人たちが刺激し合っている。ヨーク大学で案内してくれた先生に「劇場がありませんか？」と尋ねたら、「あります」の返事。さすがは演劇好きのイギリスの大学だ。ヨークではまだ専属の劇団はいなかったが、サウサンプトン大学の劇場には専属劇団があって、もちろん公演は一般市民に公開されている。劇場自体は、大学での集会や授業の実習などに使われるから、日本の大学のホールよりはよほど有効利用されているだろう。さらに、体育施設はクラブ活動のためだけではなく、一般の学生・教員にも使わせる。イギリスで人気のあるスヌーカー(ビリヤードに似る)台も数台設置されている。これらの管理に常駐している専門の職員がいるから、大きなフィットネスクラブだと思えばいい。またウェールズのカーディフ大学では、学生自治会がイギリス最大の「学生会館」を運営しているが、ここにはさまざまな施設が入っていて、「クラブ」まである。週3、4日はダンスホールを運営するそうだ。

日本の大学生は、クラブ活動などしなければ、大学は授業を受けに行くところで、授業時間以外は、学内ですごすところが少ない。勢い、外に出て(キャンパスに囲いが無いイギリスの大学には、この表現も当たらないのだが)、往年なら麻雀をしたりして過ごすこととなった。日本では大学の周辺の町が交流の場となるのだが、大学が町から遠く離れたところに設置されたなら、ああ！

要するに、イギリスでは大学の中で暮らせるのだ。単に授業を受けるという以上に、さまざまなアメニティが提供されていて、同じ授業料だったら、日本の大学に行くよりも、イギリスの大学に行く方が得だ、と思うだろう。もともと、若い連中は、お茶を飲んでだべってばかり、仕事よりフィットネスの予約時間を優先する、などと渋い顔をする教授がいるのも事実ではあるが。

このように研究と教育の環境を整え、そこで生活する教員や学生にアメニティを提供することも、大学の魅力を高めるひとつである。イギリスは、大学内で異質な人々が交流するとき、一見して見えないかもしれない研究と教育の効果が小さくないことを知っているのだと思う。辺鄙なところに大学のキャンパスを作って、学内は研究室と講義室、少し離れて学食と学生寮というのでは、あまりにストイックにすぎる。せっかく知的な連中が集まっているのだから、彼らを交流させない手はない。大学を国際化することは、イギリス(だけではない)のような大学を経験した学生や研究者が、日本の大学に増えるということで、彼らはまちががなく心の中で両者を比較する。かつて京都大学に勤務されたイギリスの教授が、日本の大学にバーのないのを惜しんでおられた。教授によると、イギリスではバーで出会う異分野の研究者とのつながりが、学内での共同研究に結びついている、とのことだった。日本の大学がよりよくなるようにと願って、アドバイスをされたのだった。

目次

●Recent Dialogues & Engagements—今四半期に JSPS London が接触した主な人物—	5
●業務報告	7
I. Headlines	7
在英日本人研究者登録ページ開設	7
II. 事業報告	9
1. JSPS 事業説明	9
The University of Liverpool 訪問および事業説明会	9
University of Glasgow での合同説明会	11
University of Southampton 事業説明会	13

University of York 事業説明会	14
Aston University 事業説明会	15
2.シンポジウム	16
日英シンポジウム開催スキーム 2011 年度開催分募集開始.....	16
3.同窓会	16
Pre-Departure Seminar and Alumni Evening	16
4.外国人特別研究員(欧米短期)	17
2011 年度度外国人特別研究員(欧米短期)第1回申請受付状況	17
III.トピックス.....	19
1.会議・講演会等出席	19
BBC ワールド パネル・ディスカッション番組参加	19
JETRO テクノロジーセミナー「Low Carbon, Energy and Sustainable Power」.....	19
University of Cambridge, Department of East Asian Studies, Asian Studies Centre Seminar 出席	20
2.関係者との対談.....	20
理化学研究所野依理事長の来訪とノーベル化学賞	20
UCL 大沼教授との打合せ(JSPS ロンドン/JETRO ロンドン共催会議に向け)	21
Royal Society との会談	21
奈良先端科学技術大学院大学 国際人材育成プログラム研修チーム来英	22
Wellcome Trust との会談	22
ブリティッシュ・カウンシルとの会談.....	22
IV.在英政府関連団体連絡協議会	24
在英政府系法人勉強会	24
広報連絡会議	24
●英国学術調査報告	25
I. 政府の学術関連施策の動向	25
1.ビジネス・イノベーション・技能省(BIS:UK Department for Business, Innovation and Skills)の動向	25
ノーベル生理学・医学賞、物理学賞、経済学賞の受賞	25
Brown 卿が政府に提出した報告書について	25
科学大臣が EU の Framework Programme について審議を開始	26
Spending Review 2010 の公表	26
HEFCE の年次会合における David Willetts 科学・担当大臣の講演	26
英国が研究開発協力の世界的なパートナーとなるための新しいプログラムの実施	27
技術センターへの £2 億の投資.....	27
高等教育を進展させる計画の策定	27
景気後退の中、宇宙分野が例外的な経済成長を遂げる	27
継続教育に関する Vince Cable BIS 大臣の講演について.....	28
政府、共同ベンチャーを発表。国際的な科学イノベーション拠点として Deresbury Laboratory を創設	28
貧しい学生の授業料 2 年間分を無料にすることについて.....	28
高額授業料を付加する大学へのルールの設定について.....	28
高等教育を進展させる計画について.....	28
2012/13 年からの授業料変更に関する議会承認について	29
HEFCE への補助金交付通知(annual Grant Letter)の発表について	29
2.内務省(Home Office)の動向について	29

EU 圏外からの労働者の抑制について.....	29
II. 学術新興機関の研究施策の動向	29
1.英国研究会議(RCUK: Research Council UK)	29
体外受精の父がノーベル賞受賞(MRC)	29
ノーベル賞受賞をもたらす英国経済への利益(EPSC)	29
英国の研究はビジネスの生産性と経済成長の鍵となる(RCUK)	30
“Innovation and Knowledge Centres”を£2,000万かけて設立(EPSC)	30
最先端の医学研究施設 UKCMARI の設立に関する公式な合意について(MRC)	30
学術研究をビジネスに最大活用(ESRC)	30
ノーベル賞受賞は、“英国経済に著しい効果をもたらすだろう”(EPSC)	31
英印間で国際協力 インドの食に関連した健康問題(BBSRC)	31
BBSRC 研究者、日本との共同研究で受賞(BBSRC)	31
新しいパブリック・エンゲージメント(理解増進)の合意の発効(RCUK)	31
Mr John Armit, EPSC 会長に再任(EPSC)	31
Research Council の予算発表(RCUK)	32
2.Royal Society の動向	32
科学が予想する将来—科学がどのように世界で最も大きな問題を解決するのかに—の発刊について	32
Sir Paul Nurse の就任	32
3.Royal Academy of Engineering (RAE) の動向	32
包括的歳出見直しを受け、提言を発表	32
2011 年から 2015 年までの研究補助金額が確定	33
4.British Academy の動向	33
高等教育財政が直面している変化	33
人文・社会科学への助成拡大を歓迎	33
III. 高等教育助成機関及び関連機関・団体の動向	34
1.イングランド高等教育財政会議(HEFCE: Higher Education Funding Council for England)の動向	34
Study of UK Online Learning (オンライン講座に関する情報提供の改善)	34
試行的な調査が切り開く、英国の新しい研究評価の枠組みにおける主要要素の重要性	34
英国学生が海外留学で得るもの	34
2011-12 年の高等教育機関への補助金交付	34
2.英国大学協会(UUK: Universities UK) の動向	35
高等教育機関の予算削減は逆効果—UUK の提言	35
UUK が公表したパートタイム学生に関する報告書	35
英国の大学と発展途上国との協働	35
President Steve Smith, UUK が発した現在の高等教育改革に関する警鐘	35
高等教育機関が担う経済を活性化させるための重要な役割についての報告書	36
3.高等教育統計局(HESA: Higher Education Statistics Agency) の動向	36
英国高等教育統計 2008/09 の公表	36
高等教育機関のベンチマークに関する報告書	37
4.その他機関の動向	37
Sutton Trust の動向について—学費の上昇が及ぼす影響についての報告書(Increasing university income from home and overseas students: what impact for social mobility)	37
UCAS の動向について—高等教育機関の入学状況に関する報告書	37

5.大学等研究機関の紹介	38
●業務日程.....	39
●旧 JSPS ロンドンスタッフの来訪	42

●Recent Dialogues & Engagements—今四半期に JSPS London が接触した主な人物—

在英英国人等

- ◆ Mr Ken Arnold, Head of Public Programmes, Wellcome Trust
- ◆ Dr Hans Hagen, Senior Manager (International), Grant Section, The Royal Society
- ◆ Prof. Stephen Holloway, Executive Pro-Vice-Chancellor, University of Liverpool
- ◆ Sir Howard Newby CBE, Vice-Chancellor, University of Liverpool
- ◆ Prof. Chris Rudd, Pro-Vice-Chancellor, University of Nottingham
- ◆ Dr Richard Masterman, Director, Research Innovation Services, University of Nottingham
- ◆ Prof. Dame Wendy Hall DBE, Dean, Faculty of Physical and Applied Science, University of Southampton
- ◆ Ms Jo Doyle, Director of the International Office, University of Southampton
- ◆ Prof. John Local, Pro-Vice-Chancellor for Research, University of York
- ◆ Ms Hilary Layton, Director of Internationalisation, International Relations Office, University of York
- ◆ Mr Michael Barrett OBE, Trustee, Sainsbury Institute
- ◆ Dr Timothy Clark, Head of Japanese Section, The British Museum

在英邦人

- ◆ 岡庭 在英国日本国大使館公使
- ◆ 井上 在エディンバラ日本国総領事館領事
- ◆ 花岡 在英日本商工会議所(JCCI UK) 事務総長
- ◆ 神 JICA 英国事務所長
- ◆ 後藤 日本クラブ(Nippon Club)事務局長
- ◆ アスロン 日本航空(JAL)ロンドン支店営業所長
- ◆ 石田 国際交流基金(Japan Foundation)所長
- ◆ 藤島 自治体国際化協会(CLAIR) 所長
- ◆ 富岡 国際観光振興機構(JNTO) 所長
- ◆ 高橋 日本スポーツ振興センター(NAASH)所長
- ◆ 野口 Vice President, EU-Japan Relations, TOSHIBA OF EUROPE LIMITED

日本等からの出張者

- ◆ 野依良治 理化学研究所理事長一行
- ◆ 川口昭彦 大学評価・学位授与機構特任教授
- ◆ 古川佑子 大学評価・学位授与機構客員教授
- ◆ 阿川尚之 慶應義塾大学常任理事/副学長(国際担当)
- ◆ 白崎隆典 東北大学学生支援課長一行
- ◆ 岡本哲治 広島大学理事・副学長(産学官社会連携・広報・情報担当)

- ◆ 佐藤利行 広島大学国際センター長
- ◆ 末次憲一郎 広島大学産学・地域連携センター理事一行
- ◆ 石野貴史 立命館大学国際部国際企画課課長一行
- ◆ アリソン・ビール ブリティッシュ・カウンシル駐日副代表
- ◆ 田中梓 ブリティッシュ・カウンシル教育推進・連携部長

平松センター長のコラム



Director's Column

サウサンプトン大学に行
って、事業説明会をしてき
ました。その音響振動研究
所 (Institute for Sound and
Vibration Research) は、世
界にも数少ない音響学の研
究所で、国際的に高い評価

を得ていて、私はそこで28年前に1年間客員研究員をした
のでした。この大学は航空工学や海洋学が有名で、1950
年代と記憶しますが、ここで研究された京都大学航空工学
科の神元五郎先生が、御著書に「サウサンプトン大学で量
子流体力学の概念を得た」とお書きになっています。

私が最後に行ったのは、13年前でした。そしてこの13年
間のサウサンプトン大学の変わりようは、まったく目を見はる
ものでした。見慣れないビルがいっぱい建っているのです。

昼食をご一緒した Dame Wendy Hall 教授によると、30年前
に7000人だった学生数が、今2万人を超える、これは過去
3代の学長がすばらしかった結果だとのこと。同大学
はランキングでも高い位置につけています。訪問の数日前
に来年度の予算が発表され、大学関係予算も大きく削減さ
れることとなりましたが、我々はあまり心配していない、とか
つての同僚も言うておりました。

学長次第で大学の運命が大きく影響されると、ごく当然
のように認識されている模様で、日本の大学もちろん例
外ではないでしょうが、イギリスにおいては一歩も二歩もこ
の事態が先んじていて、おそらく日本もそのようになってい
くのでしょう。

最後に、音はどうかというと、ロンドンと違い、やはりクラク
ションは鳴らされませんでした。英国のよき運転文化が守ら
れていることを知り、ちょっとほっとしたところです。

●業務報告

I. Headlines

在英日本人研究者登録ページ開設

JSPS ロンドンでは、ホームページに在英日本人研究者登録ページを開設しました。これまでの様々な活動を通して接触した多数の在英日本人研究者の方々を当方の名簿に含ませていただいております。ただ、中には既に帰国等された方も含まれているため、名簿の整理を行うとともに、これを機会に緩やかではあります、ある程度の組織体とするため、在英日本人研究者の方々からの登録制とすることにしました。登録された方には、これまでどおりニューズレターや在英日本人研究者会議の案内などをお送りいたしますが、研究者同士のネットワークの場としてご利用いただけるようになっております。



(在英日本人研究者登録ページ)

11月19日に当登録ページを公開し、在英日本人研究者に当登録ページを通じた登録をお願いしたところ、12月末時点で110名を超える研究者の皆様からご登録いただいております。

登録者には、登録者用ページから、登録内容変更、登録消去ができるほか、研究者間のネットワークを深めていただくため、他の登録者との情報共有に同意される方には、システム上で登録者一覧を閲覧できる仕組みになっています。また、ご希望されればメーリングリストにも参加が可能です。



(登録者トップページ)



(在英日本人研究者リストページ)

今後も、当ページが在英日本人研究者にとって有益なものとなるよう、皆様のご意見・ご要望を伺いながら、改善していく予定です。

なお、2011年4月を目途に、JSPS ロンドンからの情報提供・各種案内送付先は、現行の登録者リストから本登録ページから登録された新リストへ移行する予定です。

～ご登録がまだお済みでない在英日本人研究者の方は、ぜひ登録くださいますよう、よろしく申し上げます。～

(関口・多田)

II. 事業報告

1. JSPS 事業説明

The University of Liverpool 訪問および事業説明会

2010年10月4日および5日、平松センター長、関口副センター長、Ms Watson International Programme Coordinator、吉川国際協力員が、The University of Liverpoolを訪問した。



Sir Howard Newby 学長と平松センター長

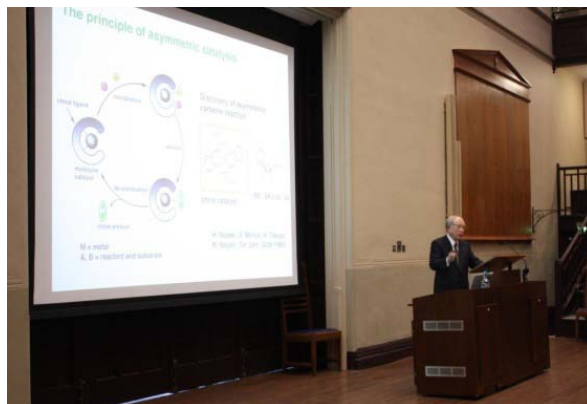
10月4日は、The University of Liverpool 内 Victoria Gallery & Museum にて The University of Liverpool と理化学研究所の協定締結のセレモニーが行われ、両機関の関係者の他、JSPS ロンドンからの出張者および新井在英国日本国大使館一等書記官も出席した。セレモニーでは The University of Liverpool の Professor Sir Howard Newby CBE, Vice-Chancellor、理化学研究所側の野依良治理事長がそれぞれサインをし、固い握手を交わした。



サイン後握手をする Professor Sir Howard Newby CBE (左)と野依理事長(右)

その後、特別記念公演として野依理事長の講演が行わ

れたが、広い会場内は多くの聴講者で満員となった。聴講者たちはノーベル賞受賞者である野依理事長の講演にとっても感激している様子で、熱心に耳を傾けていた。



講演をする野依理事長



野依理事長の講演に聞き入る参加者

夜は Prof. Sir Howard Newby CBE 主催の夕食会が開かれた。The University of Liverpool からは著名な研究者たちも出席し、和やかな雰囲気の中で情報交換が行われた。

10月5日は、午前中、JSPS ロンドンと The University of Liverpool との情報交換会が行われ、The University of Liverpool からは研究者である Prof. Steven Holloway, Executive Pro-Vice Chancellor、Prof. Stephen Flint, University Director of International Research Projects、Prof. Samar Hasnain, Faculty of Health and Life Sciences および事務担当者である Ms. Christine Bateman, International Development Officer、Ms. Claire Kidman, Support Officer, International Office が出席した。

まず、関口副センター長が JSPS プログラム概要につい

て説明した。その後、前日に行われた The University of Liverpool と理化学研究所の協定締結の話題へと移り、その中で The University of Liverpool から現在日本を含めた東アジアとの共同研究の活発化を目指しているとの話があった。これに対し JSPS ロンドンからは国際共同研究プログラムが紹介され、今後の連携の可能性についても話し合われた。

午後からの JSPS の事業説明会では Prof. Samar Hasnain が司会を務め、Prof. Steven Holloway, Executive Pro-Vice Chancellor および平松センター長が挨拶を行った。



平松センター長の挨拶

続いて、新井在英国日本国大使館一等書記官から日本の科学技術外交について講演いただいた。その後、関口副センター長が JSPS の概要、吉川国際協力員がフェローシップ事業の説明を行った。さらに JSPS の元フェローであり、英国同窓会員でもある Dr. David Hodgson もフェローシップでの体験談を行い、参加者の目線から事業を知ることが出来る機会となった。



JSPS の事業説明を行う関口副センター長



フェローシップの説明を行う吉川国際協力員



ブースで質問に答える吉川国際協力員(左)と Ms Watson International Programme Coordinator (右)

説明会には多くの学生が出席し、事業についての質問もたくさん寄せられた。また、用意した資料も次々になくなり、学生たちの関心の高さが伺えた。



JSPS London Presentation at the University of Liverpool

Prior to this presentation at 12.00 noon there will be a buffet lunch served in Room SR2, Second Floor, Life Sciences Building

Place: Lecture Theatre 2, Life Sciences Building
University of Liverpool
Tuesday, 5th October 2010
1:00 pm – 2:30 pm

Chair: Professor Samar Hasnain	
1.00 – 1.05 pm	Opening remarks by Professor Samar Hasnain (Max Perutz Professor of Molecular Biophysics, University of Liverpool)
1.05 – 1.10pm	Remarks from Professor Kozo Hiramatsu, (Director, JSPS London)
1.05 – 1.15 pm	'Japan's Science and Technology Diplomacy' (Mr. Tomohiko Arai, First Secretary (Science and Technology), Embassy of Japan, London)
1.20 – 1.35 pm	'JSPS – Japan's Research Funding Agency' (Mr. Takeshi Sekiguchi, Deputy Director, JSPS London)
1.35 – 1.50 pm	'JSPS Fellowship Programmes' (Ms. Kaori Yoshikawa, International Programme Associate, JSPS London)
1:50 – 2.05 pm	'Experiences as a JSPS Fellow' (Dr. David Hodgson, School of Environmental Sciences, Liverpool University)
2.05 – 2.30 pm	Questions and Answers

当日のプログラム

(吉川)

University of Glasgow での合同説明会

2010年10月15日、University of Glasgow で開催されたファンディング説明会に関口副センター長及び Ms Watson International Programme Coordinator が参加した。JSPS ロンドンでは毎年 University of Glasgow にて、同大学戸田リサーチ&エンタープライズ部門マネジャーと連携し、独自に JSPS の事業説明会を行ってきた。今回は同大学が企画した”Japanese Funding Opportunities Information Meeting”の中で、国際交流基金ロンドン事務所とともに、研究者向けのプログラムを紹介した。JSPS ロンドンからは、Ms Watson International Programme Coordinator が外国人研究者用のフェローシップ・プログラムを中心に説明した。また、JSPS 元フェローでもある Andy Furtong 教授からは日本での研究経験が紹介された。

Beaumont 副学長の司会のもと、参加した約 40 名の研究者からは、多くの質問が寄せられた。



Beaumont 副学長の挨拶

また同じ時間帯に、別会場では、在英日本大使館及び在エディンバラ日本総領事館による文部科学省国費留学生

制度、JET プログラムについての説明会も同時開催されており、”Japan Day”と言うに等しいイベントとなった。



JSPS 事業を説明する Ms Watson International Programme Coordinator



説明を聞き入る参加者



**‘Japanese Funding Opportunities Information Meeting:
Japan Society for the Promotion of Science
and Japan Foundation’**

Seminar Room 1 (Yudowitz), Wolfson Medical School Building,
University of Glasgow,
Friday 15th of October 2010
10.30am - 11.30am

**Chair: Professor Steve Beaumont, Vice Principal (Research & Enterprise),
University of Glasgow**

10.30 - 10.35am	Opening address- Professor Steve Beaumont
10.35 - 10.50am	Ms Polly Watson, International Programme Coordinator, Japan Society for the Promotion of Science London
10.50 - 10.55am	Professor Andy Furlong, School of Education, on his experience of a former JSPS Fellow
10.55 - 11.05am	Questions & Answers
11.05 - 11.20am	Mr Neil Cantwell, Programme Officer for Japanese Studies and Intellectual Exchange, Japan Foundation London
11.20 - 11.30am	Questions & Answers
11.30am	Coffee/tea and Networking

Useful contacts

JSPS London
Home page: <http://www.jsps.org/>
Ms Polly Watson's email address: polly@jsps.org

Japan Foundation London
Home page: <http://www.jpff.org.uk/>
Mr Neil Cantwell's e-mail address: neil.cantwell@jpf.org.uk

Great Britain Sasakawa Foundation
<http://www.gbsf.org.uk/>

Daiwa Anglo-Japanese Foundation
<http://www.dajf.org.uk/>



当日のプログラム

(関口)

University of Southampton 事業説明会

2010年10月22日、南イングランドにある University of Southampton に平松センター長、Ms. Watson, International Programme Coordinator、多田国際協力員が出張し、事業説明会を開催した。

約50名の研究者・学生の参加者を集め、水田博教授 (Head of NANO Group, School of Electronics and Computer Science) の司会進行によりプログラムが進められた。



水田教授による司会

はじめに、University of Southampton より Ms Jo Doyle, Director of the International Office の開会挨拶および JSPS ロンドンより平松センター長の挨拶があった。平松センター長は約30年前に同大学で研究した経験があり、今回、事業説明会で再び同大学と関わる喜びを述べた。



Ms Jo Doyle, Director of the International Office の挨拶



平松センター長の挨拶

続いて JSPS ロンドンから、Ms. Watson, International Programme Coordinator による JSPS 全体の事業説明、多田国際協力員による JSPS フェローシップ事業説明を行った。説明後には参加者からの質問を受け付け、申請資格や申請方法の詳細、受入研究者とのコンタクト方法等、熱心な質問が絶えず、関心の高さがうかがえた。



Ms Watson, International Programme Coordinator による説明



多田国際協力員による説明

その後、水田教授から、日英を往来した自身のキャリアの紹介にはじまり日英の研究環境・文化の違いなど、ユーモアを交えながらプレゼンテーションがあり、参加者の関心を惹きつけた。引き続き3名の元 JSPS フェローから、日本での研究、研究室や日常の生活など、興味深いエピソードが披露され、参加者にとっては疑問や不安が解消される貴重な機会となった。なお、Professor Philip L. Newland, Deputy Head of School(Enterprise), School of Biological Sciences は、外国人特別研究員として日本で2年間の研究滞在の後も、外国人招へい研究者、BRIDGE フェローシップ等 JSPS 事業により日本を訪れ、共同研究を続けている。

全てのプレゼンテーション終了後には、会場を移して懇親会があり、参加者が直接 JSPS 職員に質問できる機会となり、また参加者どうしの情報交換の場となった。



説明に聞き入る参加者



元 JSPS フェローによるプレゼンテーション

(多田)

University of York 事業説明会

2010年11月17日、イングランド北部にある University of York に平松センター長、関口副センター長、Ms. Watson, International Programme Coordinator、横山国際協力員が出張し、事業説明会を開催した。University of York は、英国ランキングでトップ 10 に入る大学であり、また教職員・学生数のうち 20% が外国人であるなど国際化も進んでいる。

当日は、Professor John Local, Pro Vice Chancellor for Research の司会進行で進められた。はじめに Professor John Local の開会挨拶及び平松センター長の挨拶があった。

続いて JSPS ロンドンから、関口副センター長による JSPS 全体の事業説明、横山国際協力員による JSPS フェロウシップ事業説明が行われた。その後、元 JSPS フェローの Dr. Martin Cockett, Department of Chemistry から体験談が行われ、外国人特別研究員にて分子科学研究所に滞在した際の研究・生活について、今年度 Bridge Fellowship を利用し 20 年ぶりに当時の研究室の研究者を訪問した等の説明があった。



開会挨拶をする Prof. John Local 副学長



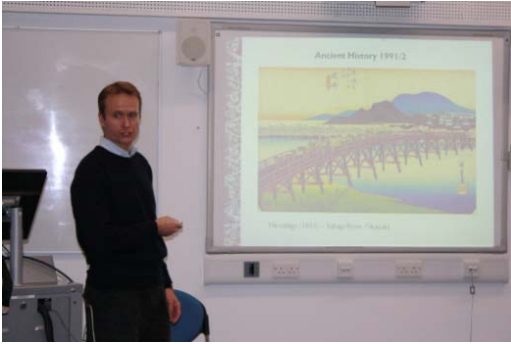
説明する関口副センター長



挨拶をする平松センター長



説明する横山国際協力員



説明する Dr. Martin Cockett 元フェロー



参加者の様子

会場には約 40 名の研究者・学生が集まり、質疑応答も活発に行われた。また当日は Ms. Hylary Laton, Director of Internationalisation の参加もあり、終了後は大学の国際戦略について意見交換も行った。

Aston University 事業説明会

2010 年 12 月 15 日、関口副センター長、Ms Watson International Programme Coordinator、吉川国際協力員が、Aston University で開かれた "UK-Japan Workshop on Photonics and Bio-Medical Engineering" に参加した。12 月 15 日から 17 日までの 3 日間開催されたこのイベントは、Aston University と静岡大学を主とする日本の大学の研究者が各自の研究内容を発表し交流を行ったもので、日英共同研究強化のため、JSPS 同窓会員である Dr Alex Rozhin によって企画された。

当日は、ワークショップの中で関口副センター長が JSPS の事業説明を行った。また、会場外では大学のメインエントランスに JSPS ロンドンのブースを設置し、研究者や学生たちに積極的に広報活動を行った。ブースには多くの人が立ち寄り、フェローシップ事業などについての質問が寄せられた。

事業説明会に先立って、Ms. Sandy Ritter, International Relations Manager の案内のもと、施設見学を行った。2000 年からのキャンパス拡大計画のうち現在第一段階が終了しており、新しく完成した建物のうち、2つの劇場を備えた Department of Theatre, Film and Television, 会議、レクチャー施設等がある Ron Cooke Hub、学生施設等を見学した。学内には無料バスも走っており、広大な敷地に最新設備を備えたキャンパスの中、落ち着いた雰囲気の中で学業に専念できる環境であると感じた。



University of York

(横山)



会場の様子

また、吉川国際協力員が国際担当オフィスの Mr. David Tobin, Senior International Officer とも会談を行い、Aston University が日本人留学生獲得のために行っている広報活動等について説明を受けた。



学生の質問に答える Ms Watson
International Programme Coordinator



フェローシップの説明をする吉川国際協力員
(吉川)

2. シンポジウム

日英シンポジウム開催スキーム 2011 年度開催分募集開始

2010 年 10 月 28 日に、日英シンポジウム開催スキーム 2011 年度開催分の募集を開始した。

当スキームは、JSPS ロンドンが昨年 6 月に新規事業として立ち上げ、在英日本人研究者会および英国 JSPS 同窓会の研究者を対象に、申請者の所属機関が組織的に関与する質の高い日英共同シンポジウムに対して、日本からの講演者旅費、シンポジウム開催費などの助成を行うものである。本スキームを通じて、日本の学術研究のプレゼンス向上、日英共同研究促進、日本の大学の国際化支援につなげる。

【タイムスケジュール】

募集期間：2010 年 10 月 28 日～2011 年 1 月 31 日

採用決定：2011 年 3 月上旬予定

シンポジウム開催：2011 年 5 月～2012 年 2 月までの期間

【詳細情報】

・在英日本人研究者用：

“Symposium Scheme for Japanese Researchers Based in the UK”

http://www.jpsps.org/institute/fr_symposium20100601.html

・英国 JSPS 同窓会用：

“Symposium Scheme for the UK-JSPS Alumni Association”

http://www.jpsps.org/alumni/fr_symposium_20100601.html

(多田)

3. 同窓会

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening



2010年10月20日、JSPS ロンドンにおいて JSPS 外国人特別研究員、外国人特別研究員(欧米短期)、研究者招へい事業参加者のための Pre-Departure Seminar を開催した。

当日は平松センター長によるオープニングリマークから始まり、関口副センター長が JSPS の概要説明のプレゼンテーションを行った。その後、Dr. Chris Pearson, Rutherford Appleton Laboratory がフェローシップの体験談を発表した。各発表には日本での生活への不安が軽減されるよう、生活面からのアドバイスが多く盛り込まれ、参加者からも積極的に質問が寄せられた。また、The Royal Society、EPSRC からもそれぞれの事業説明が行われ、帰国後のキャリアに関連する情報も提供された。



フェローシップ体験談をする Dr. Chris Pearson

セミナー終了後に開催された JSPS Alumni Evening では冒頭にて同窓会長である Dr. Martyn Kingsbury による同窓会の説明が行われた。

続いて Bridge Fellowship、FURUSATO Award、Symposium Scheme 授賞式が行われ、平松センター長より受賞者に対し証書と記念品が授与された。

同窓会メンバーも多数参加し、参加者は同窓会メンバーや他フェローシップの参加者との交流を活発に深めていた。



Dr. Martyn Kingsbury 同窓会長と説明を聞く参加者



受賞者に記念品を渡す平松センター長

(横山)

4. 外国人特別研究員(欧米短期)

2011 年度度外国人特別研究員(欧米短期)第1回申請受付状況

JSPS ロンドンでは、外国人特別研究員(欧米短期)事業の募集を年2回行っている。9月に開始した2011年度第1回(2011年5月1日~2012年3月31日渡日分)の募集では、12月1日の締め切りまでに下表のとおり34名の申請を受け付けた。今後は、人文・社会系は The British Academy

に、自然科学系は EPSRC 等の Research Councils から紹介を受けた審査員及び在英日本人研究者に書面審査を依頼し、本センターにおける審査会を経た後、JSPS 本部への推薦者が決定される。

総計 (All)

Nationality	No	Percentage	Current Affiliation (Institution)	No	Percentage
British	24	70%	Imperial College London	4	10%
Italian	4	12%	University of Bristol	3	9%
French	2	6%	Cranfield University	3	9%
German	2	6%	The University of Birmingham	2	6%
American	1	3%	University of Cambridge	2	6%
Greek	1	3%	Newcastle University	2	6%
Total Represented	34		The University of Nottingham	2	6%
			University of Oxford	2	6%
			The University of Reading	2	6%
			University of Bath	1	3%
			Birkbeck, University of London	1	3%
			Cardiff University	1	3%
			Durham University	1	3%
			The University of Edinburgh	1	3%
			The University of Leicester	1	3%
			The University of Manchester	1	3%
			The Open University	1	3%
			The University of Sheffield	1	3%
			University College London	1	3%
			University of Warwick	1	3%
			The University of York	1	3%
			Total no. of institutions: 21	34	

自然科学分野 (Natural Sciences)

Nationality	No	Percentage	Current Affiliation (Institution)	No	Percentage
British	18	72%	Imperial College London	4	16%
Italian	3	12%	Cranfield University	3	12%
French	2	8%	University of Bristol	2	8%
German	1	4%	The University of Nottingham	2	8%
Greek	1	4%	University of Oxford	2	8%
Total Represented	25		The University of Reading	2	8%
			University of Bath	1	4%
			University of Cambridge	1	4%
			Cardiff University	1	4%
			The University of Edinburgh	1	4%
			The University of Leicester	1	4%
			The University of Manchester	1	4%
			Newcastle University	1	4%
			The Open University	1	4%
			University College London	1	4%
			The University of York	1	4%
			Total no. of institutions: 16	25	

人文・社会科学分野 (Humanities and Social Science)

Nationality	No	Percentage
British	6	67%
American	1	11%
German	1	11%
Italian	1	11%
Total Represented	9	

Current Affiliation (Institution)	No	Percentage
The University of Birmingham	2	23%
Birkbeck, University of London	1	11%
University of Bristol	1	11%
University of Cambridge	1	11%
Durham University	1	11%
Newcastle University	1	11%
The University of Sheffield	1	11%
University of Warwick	1	11%
Total no. of institutions: 8	9	

(吉川)

III. トピックス

1. 会議・講演会等出席

BBC ワールド パネル・ディスカッション番組参加

2010年11月15日、平松センター長がBBCワールドの新しいシリーズ「Horizons」のキックオフ番組の収録に参加した。これは同局からの出演依頼にもとづくものである。

今後10年間、世界がどのように変革していくかとの視点から、世界の将来を考える。経済、運輸、健康、農業、科学技術、メディア、教育など様々なテーマを取り上げるシリーズ番組で、2011年4月からスタート予定である。今回は、このシリーズのキックオフ番組に、各分野から幅広い人材18名を集めて、パネル・ディスカッションが行われた。産業界(金融、エネルギーなど)、学术界、政府系機関などからのパネルの一員として、平松センター長は、日本の最先端の科学

技術と今後の展望などの知見を期待されての参加となった。当日は、BBCで活躍するプレゼンター、Adam Shaw氏の進行のもと、まずパネル全員から「今後10年間の世界」についてショートコメントがあり、全体討論に移行した。討論では、主に世界経済を軸にして議論が展開したが、平松センター長からは科学技術推進の重要性についての意見が述べられた。収録終了後は、各パネルが個別にAdam Shaw氏のインタビューを受ける枠も設定された。今回の収録を通じて、様々な視点から世界の将来を捉える機会となると同時に、日本及びJSPSを広報するよい機会となった。

(関口)

JETRO テクノロジーセミナー「Low Carbon, Energy and Sustainable Power」

2010年11月25日、東ミッドランズ地域にあるLoughborough UniversityにおいてJETROテクノロジーセミナーが開催され、JSPS ロンドンから関口副センター長と多田国際協力員が出席した。

当セミナーは、英国大学と日系企業のコネクション構築、ビジネス交流等を目的にJETRO ロンドン事務所が不定期に開催しているセミナーであり、今回は「Low Carbon, Energy and Sustainable Power」をテーマに、東ミッドランズ地域の政府関係機関、研究機関、日系企業および日本政府系機関が参加した。

午前中のセミナーでは、東ミッドランズ地域の地域開発公社であるEMDAをはじめとする政府関係機関並びにNEDO ヨーロッパオフィスよりプレゼンテーションがあり、各機関の環境・エネルギー政策・技術への取り組みが紹介さ

れた。午後は、参加した企業と研究機関の個別ミーティングが実施されるほか、ミーティング会場横に各参加機関のブースが設置され、各機関の事業紹介および情報交換の場となった。



関口副センター長

JSPS も他の日本政府系機関とともにブースを設置し、英国大学を中心に事業紹介した。ラフバラ大学、ノッティンガム大学等のすでに JSPS ロンドンと関係のある大学の他にも、東ミッドランズ地域の大学・研究機関や政府関係機関に JSPS のことを知ってもらう良い機会となった。

【参考】

<http://www.englandseastmidlands.com/Jetro2010.aspx>



多田国際協力員



英国大学、研究機関のブース



荒川 JST パリ事務所長

(多田)

University of Cambridge, Department of East Asian Studies, Asian Studies Centre Seminar 出席

2010年11月29日、横山国際協力員、多田国際協力員、吉川国際協力員が University of Cambridge, Department of East Asian Studies を訪問し、Asian Studies Centre Seminar に出席した。この公開セミナーは Dr. Barak Kushner が中心となって主催し、アジア研究の様々なテーマを取り上げ、週1回開催されている。

当日は、Trade and Tragedies in Twelfth Century Japan というテーマで、Professor Mikael Adolphson, University of Alberta による講演が行われた。平家時代の中国との活発な貿易について、平清盛が大輪田泊を整備し、金等を輸出し、絹、香料、貨幣などを輸入していた等の説明があり、約40名の研究者、学生から活発な質疑応答や議論が行われた。



会場の様子

セミナー終了後のレセプションにて、Dr. Barak Kushner や他の参加者に対し JSPS の活動説明や日英交流についての意見交換を行った。

(横山)

2. 関係者との対談

理化学研究所野依理事長の来訪とノーベル化学賞

2010年10月6日、理化学研究所の野依理事長、油谷部長、丸山課長補佐が JSPS ロンドンを訪問された。

同日発表された鈴木章博士、根岸栄一博士のノーベル

化学賞受賞を受け、野依理事長(2001年ノーベル化学賞受賞)は JSPS ロンドンにて、スカイプを通じて理化学研究所本部と中継し、日本の各メディア向けに約30分の記者会

見を行われた。会見では、両博士の功績を称えるとともに、研究の萌芽から受賞にいたるまでは長い年月が必要だということも強調され、独創的研究に挑戦する若手研究者への期待と彼らへの継続的なサポートの重要性なども述べられた。その後、野依理事長は、読売新聞ロンドン支社、中日新聞ロンドン支社のインタビューも受けられた。

理化学研究所一行は、10月4日に開催されたリバプール大学と同研究所の共同研究署名式、10月6日の王立化学協会(Royal Society of Chemistry)からの野依理事長へのメダル授与式(Award of Sir Derek Barton Gold Medal)、JSPS ロンドン訪問のために渡英中であった。

日本人研究者2名のノーベル化学賞受賞という快挙に対する野依理事長のメッセージ配信の場に JSPS ロンドンがリアルタイムで貢献できたことは喜ばしい経験であった。



平松センター長と野依理研理事長



スカイプを通じてメッセージを送る野依理研理事長



新聞社の取材を受ける野依理研理事長

(関口)

UCL 大沼教授との打合せ(JSPS ロンドン/JETRO ロンドン共催会議に向け)

2010年10月21日、関口副センター長は、JETRO ロンドンの渡邊課長及び平野職員とともに UCL の大沼教授を訪問し打合せを行った。大沼教授とは JSPS ロンドンの在英日本人研究者会を通じて、日常的に連携している。昨年7月 JETRO ロンドン主催の研究所長等会議の席で、大沼教授が「日本の国際化と将来」と題した講演を行ったことを契機

として、在英日本人研究者と在英企業との交流会議を開催することが企画された。今回は大沼教授とともに、会議の流れやプレゼンテーション内容などについて、話し合いを行い、開催時期は12月又は2011年1月で調整することとなった。

(関口)

Royal Society との会談

2010年10月26日、Royal Society の Dr Hans Hagen, Senior Manager 及び Dr Dorothy Wang Scheme Manager が JSPS ロンドンを訪問し、平松センター長、関口副センター長及び Ms Watson International Programme Coordinator と外国人特別研究員(対応機関推薦分)についての打合せ

を行った。広報体制、推薦スケジュール確認などの後、英国の科学技術予算の動向などについても意見交換があった。

(関口)

奈良先端科学技術大学院大学 国際人材育成プログラム研修チーム来英

2010年11月14日から25日、奈良先端科学技術大学院大学(以下、NAISTとする)から国際人材育成プログラム研修のチームが来英し、英国の大学等においてインタビュー調査を行った。国際人材育成プログラムはNAISTが、文部科学省イノベーションシステム整備事業(大学等産学官連携自立化促進プログラム)の一環として行っている職員を対象とした研修プログラムで、産学連携、研究協力事務等に関する事項について各自調査等を行うとともに、海外の研究機関等を訪れてインタビュー調査を行い報告書としてまとめている。英国が訪問先として選ばれるのは今年度が初めての試みであった。

11月17日、Imperial College Londonを訪問した研修チームに吉川国際協力員も同行した。Imperial College Londonでは Ms Angela Lin, Country Manager of Japan, International Office による大学紹介および Ms Cindy Lai, Head of Research Support による研究協力についての講義を受けた。また、Ms Angela Linは学内でJSPSのフェロシップに係る事務を担当しており、JSPS ロンドンから同席して

いた吉川国際協力員に対し、今後もJSPS ロンドンとの関係を強化していきたいとの話があった。

研修チームは11月19日にJSPS ロンドンを訪問し、関口副センター長、吉川国際協力員と懇談を行った。日本の大学職員にとってJSPSが英国で行っている活動を直接知る機会は少ないため、関口副センター長からJSPS ロンドンの事業説明を受けた後は大学側から多くの質問が出された。



JSPS ロンドンにて

(吉川)

Wellcome Trust との会談

2010年11月22日、平松センター長と関口副センター長は、Wellcome Trustを訪問し、Ken Arnold, Head of Public Programmes 及び Ms Rosie Tooby と打合せを行った。Wellcome Trust は、医学研究への助成を中心に活動する英国最大のチャリティ団体である。アメリカ出身の製薬長者のヘンリー・ウェルカム卿の財産を管理するため、1936年に設立された。

今回の打合せでは、JSPS ロンドンが次年度(2011年度)マンチェスター大学と企画するサイエンスとアートの融合をテーマとしたシンポジウムの概要説明と、シンポジウムと併設してエキシビションを行う場合の協力依頼などが行われた。

また会談終了後、Ms Tooby の案内で、医学や医学史について、一般向けの理解増進を目的として設置された「ウェルカム・コレクション」を見学した。医療機器の変遷をたどる展示、医学とアートを融合した作品、ヘンリー・ウェルカム卿のコレクションの一部など非常に興味深い展示であった。

JSPS ロンドンとは道を挟んですぐの場所に位置しているWellcome Trust であるが、近年は交流がなったため、今後連携を深めたい。

(関口)

ブリティッシュ・カウンシルとの会談

2010年12月8日、ブリティッシュ・カウンシル東京のAlison Beale 駐日副代表及び田中教育推進・連携部長がJSPS ロンドンを訪問し、平松センター長、関口副センター長と会談した。

会談では、まず、ブリティッシュ・カウンシル側から、今年11月に九州大学で開催された日英学長会議(2009年にはロンドンで開催されJSPSとの共催イベントとなった。)について概要説明があり、日本から33大学、英国からは18大

学の参加があり、両国における大学の国際化がテーマの一つとなった。留学生の獲得、学生の海外派遣、カリキュラムの国際化、若手研究者(ポスドク)のスキル向上・活用策が議論されたとのことだった。なお今後、両国の大学、産業界を巻き込んでコンソーシアム的なものを立ち上げ、具体的な成果を出す活動を新たに展開することを計画している。そのために現在両国がどの分野(高齢化社会など)に関心があるかなど調査している旨説明があった。その他、世界各

国の高等教育関係者などを一同に集めて開催される「Going Global 2011」が、2011年3月、アジアで初めて香港で開催されるとのことであった。ここでは、現在の世界的な経済不況の中で、政府、高等教育セクター、産業界の新たな連携などもテーマの一つとなる。JSPS ロンドンからは、来年度計画しているアートとサイエンスの融合をテーマとしたシンポジウムの企画について説明があった。また、会談中に上がった様々な問題（日本の高齢化社会、縮小経済社会の状況、大学と地域の共存など）について、意見が述べられた。



平松センター長、Alison Beale 駐日副代表、
田中教育推進・連携部長

(関口)

ロンドンのクリスマス

LIFE IN LONDON

クリスマス前のロンドンはとても煌びやかでした。10月末にハロウィンが終わると、11月には街はもうクリスマスモードに一変。通りにはイルミネーションが点灯し、Hyde Park では“Winter Wonderland”というマーケットが開かれ、観覧車やスケートリンクが登場してお祭りのようでした。

クリスマス当日はこちらは家族と家でゆっくり過ごす日。街の雰囲気は一変してとても静かで、お店はもちろん公共の乗り物も、地下鉄、バスと全てお休みでした。そんな中、私には Heathrow 空港まで友人を迎えに行く必要がありました。まずは Heathrow 空港行きの特急、Heathrow Express が出ている Paddington 駅までどうやって辿りつくのが最初の関門。タクシーを呼ぼうと電話をしても、混み合っていて繋がりません。徒歩でも2時間弱くらいなので、歩いている途中でタクシーはつかまえられるだろうと軽い気持ちで家を出ました。でも、普段渋滞している道路は車もまばらで、人影すら見当たりません。最初はいつもと雰囲気の違う街を楽しみながら歩いていましたが、1時間が経つ頃には疲れ果ててきました。しかもその日のロンドンは連日の大雪が止んだばかりでまだ雪も残っていて極寒。もう限界だと思ったところにやっとタクシーが通りがかりました。運転手には「こんな日に予約もなしに移動をしようとしている人がいるなんて

びっくりしたよ。」と笑われてしまいました。

なんとか Paddington 駅に到着しましたが、当然 Heathrow Express も運休。ただし、それを補うために代替のバスが出ていました。そもそも Heathrow Express は 20 分で空港に着く代わりに片道 18 ポンドもかかるという、文字通り“時間をお金で買う”システム。普段は時間よりお金を惜しみ、1 時間以上かけて 4 分の 1 以下の料金の地下鉄を利用するのですが、この日の地下鉄は全部止まっているため Heathrow Express の代替バスしか手段がありません。バスでは当然 20 分で空港に着くこともなく、1 時間以上かかるとのこと。それなのに、料金は普段と同じでした。

ちなみに前述のマーケットも、クリスマス当日は閉まっていた。やはりクリスマスは家でゆっくり過ごすものなのだと思います。



Hyde Park の“Winter Wonderland”

(吉川)

IV. 在英政府関連団体連絡協議会

在英政府系法人勉強会

2010年11月26日、在英日本政府系法人の事務所管理担当者による勉強会が JETRO ロンドンにて開催された(事務担当は当番制で、今回は JSPS ロンドン)。2008年8月にスタートした本勉強会も第14回を数えることとなった。毎回様々なテーマで意見交換が行われるが、今回は、現地職員の雇用体制、業務上の移動手段(交通費)、事務所の広報活動などについて、話し合われた。例えば、当事務所が

使用している業者の価格の妥当性や新たな業者情報なども知ることができ、この勉強会は事務所管理担当者にとって、非常に有効な意見交換の場となっている。次回は2011年1月に JOGMEC(石油天然ガス・金属鉱物資源機構)ロンドン事務所で開催予定である。

(関口)

広報連絡会議

2010年12月7日、ロンドンの日本政府系機関等の所長級会合である広報連絡会議が日本スポーツ振興センター(NAASH)ロンドン事務所で開催され、平松センター長が出席した。この会議は、在ロンドン政府系機関の相互情報連絡を目的に、隔月で開催されているものである。各機関から活動状況について報告があり、今後の共同企画についての活発な意見交換が行われた。次回は1月に在英日本商工会議所にて開催予定である。

出席者は右のとおり。

- ・在英日本商工会議所(JCCI UK) 花岡事務総長
- ・日本クラブ(Nippon Club) 後藤事務局長
- ・日本航空(JAL)ロンドン支店 アスロン営業所長
- ・国際交流基金(Japan Foundation) 石田所長
- ・自治体国際化協会(CLAIR) 藤島所長
- ・在英国日本大使館広報文化センター 岡庭所長
- ・国際観光振興機構(JNTO) 富岡所長
- ・日本学術振興会(JSPS) 平松センター長
- ・日本スポーツ振興センター(NAASH) 高橋所長

(多田)

授業料値上げに関する学生たちの抗議行動について



LONDON NEWS

11月は、2012/13年からの授業料が、現在の3,290ポンドから最高9,000ポンドまで値上げされることに反対して、英国全土で学生が参加する大規模なデモが何回か組織されました。

一部暴徒化したデモ隊が保守党などを襲撃し、逮捕された学生も50人以上いたとのこと。たまたま、10日の夜にメイフェア付近のパブにいた時も、外をにぎやかな集団が通ったと思ったら、それは授業料値上げのデモ隊だった、などということもあり、学生デモはいたる所まで深夜まで続いたようです。続いて24日にも、「DAY X」という抗議行動が組織され、国会や自由民主党を目指して数千人のデモが行われました。デモ隊の中には、太鼓を鳴らしながら行進している人もいれば、マスクをかぶった男性が大声で政府批判を始めたり、警官に詰め寄ったりと国会付近は大騒動となっていました。デモ隊の中には高校生も混じっていたので、驚いて同僚の Polly

さん(International Programme Coordinator)に高校生がデモ隊に参加することを保護者は止めないのかと聞いたところ、法律に違反するようなことはもちろんしてはいけないけれど、自分の将来に関することだから、反対などはしないとのことでした。もしウン十年前に、同じような状況があったとして、私がデモ参加と言ったら、両親に間違いなく止められたことでしょう。後から聞いたところによると、なんとこのデモには保護者(祖父母も!)も参加していたそうです。その後も抗議行動は組織され、特に下院の承認を得ることになった12月9日は朝から深夜まで学生たちの激しいデモが続き、チャールズ皇太子ご夫妻の車が襲われたことは、日本でも報道されたため多くの方がご存知だと思います。

英国の学生たちが、授業料値上げに対して大規模な抗議行動を組織したのは、自分たちの将来的な負担に直結しているからですが、今後英国の大学制度やそこで学ぶ生徒たちがどのような変化をしていくのか、多くの人がその成り行きを見守っていると思います。

(疋田)

●英国学術調査報告

I. 政府の学術関連施策の動向

1. ビジネス・イノベーション・技能省(BIS: UK Department for Business, Innovation and Skills)の動向

ノーベル生理学・医学賞、物理学賞、経済学賞の受賞

10月4・5・11日、David Willetts BIS 大学・科学担当大臣は、Prof. Robert Edwards University of Cambridge がノーベル生理学・医学賞、Prof. Andre Geim The University of Manchester、Prof. Konstantin Novoselov、The University of Manchester がノーベル物理学賞、Professor Christopher Pissarides, the London School of Economics がノーベル経済学賞をそれぞれ受賞したことについて、各氏の業績を称えるコメントを発表した。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=415795&NewsAreaID=2>

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=415813&NewsAreaID=2>

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=415916&NewsAreaID=2>

Brown 卿が政府に提出した報告書について

10月12日、Brown 卿が高等教育財政等に関して政府に対して提出した報告書 (SECURING A SUSTAINABLE FUTURE FOR HIGHER EDUCATION) について、Vince Cable BIS 大臣は将来的な高等教育財政への提言のうち、政府が支持する重要なポイントについても述べた。

また、Willetts 大臣は、現在の高等教育システムはもはや目的には合致しておらず、教育や研究における国際競争力の強化に資するような新しい財政支援の仕組みの必要性について述べた。

なお、Cable 大臣が挙げた主な内容は以下の通り。

- ・ 政府は Brown 卿の報告書の要旨を支持するが、2012 年秋入学からの実施を見据えて正式に議会に提出する前の数週間で報告書について幅広い意見、提案を受け付ける。
- ・ 詳細は、10月20日に発表される Spending Review に含まれることになるが、報告書が戦略的に正しい方向にあると信じている。
- ・ 報告書にあるとおり、政府は、授業料前払い制(入学時の授業料負担)については強く反対する。また、これまで対象外となっていたが、パートタイムの学生にも同様の措置が必要である。
- ・ おおよそ£7,000 の授業料を考えている。この授業料より高く設定する場合は、経済的要因から来る学生への公平性、教育、修学の質の向上など確保する必要がある。
- ・ 卒業生の収入に応じて公平な支払いを考慮することが重要である。

・ 報告書では、「卒業税」を含む他の選択肢も考慮しているが、「卒業税」の最も効果的な面を取り入れることは重要である。

【BIS の関係 URL】

Cable 大臣、Willetts 大臣のコメントはこちら

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=415913&NewsAreaID=2>

Cable 大臣が挙げた政府が支持する重要なポイントはこちら
<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=415930&NewsAreaID=2>

※ 高等教育財政のあり方についての報告書 (SECURING A SUSTAINABLE FUTURE FOR HIGHER EDUCATION) について

10月12日に公表された John・Brown 卿(元 BP 最高責任者)が取りまとめた報告書の主な内容は以下の通り。

- ① 高等教育機関への公平なアクセスの推進
- ② 進学を希望する学生への高等教育機関に関する十分な情報提供、高等教育機関間で質についての競争が発生することで、質に関して学生の最低限の利益を守る
- ③ 英国の高等教育機関の多様性を強化
- ④ 卒業生の財政的な貢献を強化。学生は入学時には学費を支払わず、年間£21,000 以上の収入を得得てから(政府が事前負担している)負担分を支払う(Student Finance Plan)

【Brown 卿の報告書に関する URL】

<http://hereview.independent.gov.uk/hereview/report/>

※本件については、JSPS ロンドンのホームページでも詳細な情報提供をしております。

http://www.jsps.org/information/documents/10/101013_001.pdf

科学大臣が EU の Framework Programme について審議を開始

10月13日、David Willetts 科学大臣は英国の研究開発関係者を招き、EU Framework Programme (通称 FP7) について審議を行った。現在まで研究者に授与された総額 £113万7,000のうち、£16万4,000が英国の研究者に交付されており、英国が2007年から2012年までに同プログラムで上げた実績は大きい。学术界からの参加が高いのに対し、ビジネス界からの参加率が独仏と比較して低調なため、Willetts 大臣はビジネス界からの一層の参加を呼び

かけている。FP7 の理解を深めることで汎欧州的な利益の創出を目指している。審議は2011年1月4日までの12週間継続の予定。

【BIS の関連 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/detail.aspx?NewsAreaId=2&ReleaseID=415939&SubjectId=15&DepartmentMode=true>

Spending Review 2010 の公表

10月20日、SPENDING REVIEW 2010(包括的歳出見直し2010)が財務省から公表された。今回の発表では、BIS の予算は25%削減となっている。

研究にかかる財源を除き、高等教育予算は2014-15年までの4年間で£71億から£42億へと40%削減される見込み。なお、科学、技術、工学、数学の科目の指導する財源については引き続き支援を行うとした。

財務省から公表された主な内容は以下の通り。

【BIS について】

- ・ BIS の総節約額の25%のうち、40%を高等教育分野の財源から節約し、BIS の所管する他の分野から平均16%の節約を行うが、科学や成人が技術を習得するための主要項目関連の予算は保護する。

【高等教育分野について】

- ・ 高等教育分野の主な変更として、経済的に恵まれない

い学生への特別の支援をしつつも、(大学を卒業することによって)利益を得る個人が財政的な負担を負う。

- ・ 経済成長に貢献するため、高等教育イノベーションファンドを産学連携の推進を図ることを目的とした大学へのインセンティブとするファンドに改編する。
- ・ 議会の承認を前提としているが、大学は、2012-13年の学事年度から teaching grant の減額分を政府の学生ローン支援分に充当することで、「卒業生の貢献 (graduate contribution)」を増加させることが可能となる。新しいシステムでは、卒業生は、支払いが可能になってから学費分を支払う。「卒業生の貢献」の制度に関する法案は、今冬に国会に提出予定。
- ・ 政府は、経済的に恵まれない学生を支援するため、2014-15年までに最終的に年間£150百万までを支援する、新しい National Scholarship Fund を設立予定。

HEFCE の年次会合における David Willetts 科学・担当大臣の講演

10月21日、BISのDavid Willetts 科学・大学担当大臣は、HEFCEの年次会合で10月12日に公表された高等教育財政等のあり方に関する報告書 (SECURING A SUSTAINABLE FUTURE FOR HIGHER EDUCATION) 等を踏まえた今後の展望について講演した。Willetts 大臣は、報告書に関してすべてを受け入れることはないとしながらも、多くの専門家が報告書の内容を評価しているとし、今後具体化に向けて着手するとしている。今後は、2012年の秋の実施を目指し、このクリスマス前までには、「卒業生の

貢献 (graduate contribution) 」などに関する法案を国会で審議・可決予定。

報告書の「肝」となっているのは、現在、HEFCE 経由で各大学に配分されている教育研究の基盤的経費が、学生を通じて直接配分されることにある。2012-13年の学事年度から、教育研究の基盤的経費が削減され、「卒業生の貢献」スキームを通じた経費を配分されることになるため、BIS は早急に学費に関する制度を策定する必要があるとしている。また、2011-12年の経費の詳細については、年末ごろに

HEFCE 宛に通知をする予定。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416135&NewsAreaID=2>

英国が研究開発協力の世界的なパートナーとなるための新しいプログラムの実施

10月25日、David Willetts 科学担当大臣と Lord Howe 健康担当大臣は、将来的に英国の患者に対して速やかに医薬品を供給し、英国が研究開発協力において世界のパートナーとなるための、産学官連携(学界、臨床医、ライフサイエンス系企業)の取組を開始することを発表した。実施対象分野は、炎症系の呼吸器疾患(喘息や慢性閉塞性肺疾

患)や関節炎など。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416178&NewsAreaID=2>

技術センターへの£2億の投資

10月25日、BIS は英国が最も高い技術を誇る産業において成長できるように、技術とイノベーションセンターのネットワークに£2億以上を投資することを発表。大学と経済界の溝の部分の橋渡しをし、英国の世界クラスの研究基盤によって生み出された成果を商品化することを目的としている。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416174&NewsAreaID=2>

高等教育を進展させる計画の策定

11月3日、BIS は、高等教育と学生への財政支援を改革する新しい計画の策定を発表した。主な内容としては、graduate contribution の基準値を£6,000(返済は年収£21,000になってから、収入の年間9%程度で30年以内)とする。高等教育への公正なアクセスなどに関する厳しい条件を満たした場合は、例外的に上限を£9,000までを認める。また、OFFA は大学が公平なアクセスに関する合意を守らないときは、大学が£6,000以上の学費を課せなくすることを含めた制裁を行うことができる。そのほか、National Scholarship Programme による所得者層出身の学生を対象

とした入学年次の授業料無償化、パートタイム学生の授業料を入学時に政府が負担するなど、が挙げられている。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416343&NewsAreaID=2>

※本件については、JSPS ロンドンのホームページでも詳細な情報提供をしております。

<http://www.jspso.org/information/documents/10/101108.pdf>

景気後退の中、宇宙分野が例外的な経済成長を遂げる

11月8日、UK Space Agency は英国の宇宙産業の規模と健全性についての報告書(The Size and Health of the UK Space Industry)を公表した。報告書によれば、過去2年間、英国の宇宙産業は平均10%の成長を遂げているとしている。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416420&NewsAreaID=2>

継続教育に関する Vince Cable BIS 大臣の講演について

11月16日、バーミンガムで開催されたカレッジ協会の会合において、Vince Cable BIS 大臣が継続教育の重要性について講演を行った。Cable 大臣は、職業に直結する技術の重要性に着目し、カレッジは十分にそれに関する役割を果たしているが、市場自体は十分な研修機会を与えていな

いとしており、政府の介入する余地があるとしている。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416574&NewsAreaID=2>

政府、共同ベンチャーを発表。国際的な科学イノベーション拠点として Deresbury Laboratory を創設

11月19日、BIS は、STFC、Langtree、Halton Borough Council、North West Development Agency は、イギリス経済を刺激するような、科学イノベーションの新拠点として、Deresbury Laboratory を立ち上げることを発表。20年間にわたる事業で、国内と国外からの投資を引き出し、高度な

知識を要する 6000 人の雇用を創出することを目指す。

【BIS の関連 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/detail.aspx?NewsAreaId=2&ReleaseID=416640&SubjectId=15&DepartmentMode=true>

貧しい学生の授業料 2 年間分を無料にすることについて

12月6日、BIS は、Nicholas Clegg 副首相と Vince Cable BIS 大臣が低所得者層からの優秀な学生が高等教育機関への進学を可能にするための新しい提案として、授業料 2 年間分を無料にする提案を発表した。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416934&NewsAreaID=2>

高額授業料を付加する大学へのルールの設定について

12月7日、David Willetts 大臣は、Fair Access の局長宛の指示書(guidance letter)の原稿案を公表した。Willetts 大臣は、学生のバックグラウンドに関わらず、大学進学を希望する学生が進学できるようにしたいとし、£6,000 以上の授業料を課す大学は優秀な学生を引き付けることができるようあらゆる手段を尽くしてほしいと述べた。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416945&NewsAreaID=2>

【指示書(guidance letter)の URL】

<http://www.bis.gov.uk/news/topstories/2010/Dec/new-rules-for-high-charging-universities>

高等教育を進展させる計画について

12月8日、Vince Cable BIS 大臣は、イングランドにおける高等教育制度の変更に関する計画が議会に提出されたと発表した。この変革は、フルタイムの学生により公平性をもたらす。パートタイム学生の待遇改善をもたらすものとしている。

今回発表された、既存の高等教育を進展させる計画の改善点は以下のとおり

- ・ 学部で学ぶパートタイム学生は、フルタイム学生と比較して 25%就学をしていれば、入学時に政府が授業料を負担する(原案では、33%程度)。
- ・ (卒業後の支払い基準額である) £21,000 は、2016 年

からの収入額によって変更される。2016 年は、当該制度を活用した、初めて卒業する学生がでる年(原案では、5年に1回見直し)。

・ 現行の基準額である £15,000 は、2012 年からのインフレ率に沿って変更される。現行の基準額 £15,000 は、2004 年から変更されていない。今回の変更は、現在の学生(卒業生)を支援する。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416961&NewsAreaID=2>

2012/13 年からの授業料変更に関する議会承認について

12月15日、BISは2012/2013年の授業料変更について議会の承認(12月9日下院、12月14日上院)が得られたとした。併せて下院における議会承認後に財政的な制度の主な変更点等についても公表した。来年には Brown 卿の報告書で提起された長期的な問題をカバーする高等教育白書を発表する予定だとした。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=416997&NewsAreaID=2>

※本件については、JSPS ロンドンのホームページでも詳細な情報提供をしております。

<http://www.jspso.org/information/documents/10/101216.pdf>

HEFCE への補助金交付通知(annual Grant Letter)の発表について

12月20日、BISはHEFCEへの補助金交付通知(annual Grant Letter)についてプレスリリースを行った。この通知は、2011-12年の高等教育部門への予算分配時の優先順位付けを示すだけでなく、2012-13年からの新制度が実施される際の予算案や2014-15年の見通しなどについても示唆している。今期の歳出見直し(Spending Review)では、制度変更等により高等教育に関する歳入が2011-12年の約£90

億から2012-13年の約100億へと約10%上昇する見込みとしている。一方、厳しい経済状況を踏まえ、一層の予算節約が求められているとしている。

【BIS の関係 URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=417168&NewsAreaID=2>

2. 内務省(Home Office)の動向について

EU 圏外からの労働者の抑制について

11月23日、法務省は2011年4月から適用される移民政策(ビザ Tier1、Tier2)について発表した。主な内容は以下のとおり。

- ・労働者として渡英してくる技術を習得している者、もしくは高いレベルの技術を習得している者の上限を年間21,700人とする。21,700人のうち、20,700人は技術を習得している者、1,000人は、新しく「例外的に高い技術(能力)を有している者」のカテゴリを設ける。
- ・社内の移動等で12月以上勤務する者の最低賃金を

£40,000まで引き上げる。

- ・ポイントベースシステムにおける高レベルの技術に関する制限は、企業、投資家 例外的な高い技術を有する者に適用されない。
- ・Tier2で可能な職業は、大学院レベル

【Home Office の関係 URL】

<http://www.homeoffice.gov.uk/media-centre/news/non-european>

II. 学術新興機関の研究施策の動向

1. 英国研究会議(RCUK: Research Council UK)

体外受精の父がノーベル賞受賞(MRC)

10月4日、MRCは、Prof.Robert Edwardsのノーベル生理学・医学賞についてコメントを発表。Prof.Edwardsは、不妊(症)研究における進歩と体外受精の父を言われている。Prof.Edwardsは、1958年から、MRCにおいてヒトの妊娠過程について研究し、その後 University of Cambridge や世

界最初の体外受精センターである Bourn Hall Clinic でも研究を行った。

【MRC の関係 URL】

<http://www.mrc.ac.uk/Newspublications/News/MRC007306>

ノーベル賞受賞がもたらす英国経済への利益(EP SRC)

10月5日、EP SRCは、EP SRCの研究者でもある Professor Andre Geim, the University of Manchester が、革新的な炭

素新素材に関する研究によってノーベル物理学賞を受賞したことを発表した。Prof. Geimhahaは、2009年10月に、材

料化学の可能性を研究するチームを率い£500万の研究費を獲得している。

【EPSRC の関係 HP】

<http://www.epsrc.ac.uk/newsevents/news/2010/Pages/nobelprizewinner.aspx>

英国の研究はビジネスの生産性と経済成長の鍵となる(RCUK)

10月13日、RCUKは「我々の未来への研究:英国の経済は研究への公的投資を通じて成功(Research for our Future: UK business success through public investment in research)」を発表した。主な内容は以下のとおり。

- ・ 研究への継続的な公的投資は、英国の経済・産業にとって必要。
- ・ 長期的な生産性の進歩は、基礎的な知識のブレークスルーによって導かれる。
- ・ 研究への公的な支援は民間部門における研究開発

の生産性を向上。

- ・ 研究機関は、英国や英国に投資する企業のために必要な高いレベルの人材を養成。
- ・ 英国の研究が高いレベルにあることは、国際ビジネスや産業による国内投資を惹起。

【RCUK の関係 URL】

<http://www.rcuk.ac.uk/news/2010news/Pages/101012.aspx>

“Innovation and Knowledge Centres”を£2,000万かけて設立(EPSRC)

10月13日、EPSRCは、Technology Strategy Boardと協力して研究成果の技術移転のための「Innovation and Knowledge Centre」を2つ設立することを発表した。一つは、Swansea University を中心に設立される SPECIFIC's (the Sustainable Product Engineering Centre for Innovative Functional Industrial Coatings) は、もう一つは The

University of Cambridge を中心とした Smart Infrastructure and Construction となっている。

【関係 URL】

<http://www.epsrc.ac.uk/newsevents/news/2010/Pages/InnovationandKnowledgeCentres.aspx>

最先端の医学研究施設 UKCMRI の設立に関する公式な合意について(MRC)

11月9日、UK Centre for Medical Research and Innovation(UKCMRI)がロンドンの St.Pancras 地域に設立されることについて正式に合意された。MRC、Cancer Research UK、Wellcome Trust、University of London は、慈善団体としての UKCMRI の設立に合意した。UKCMRI は、基礎生物学の調査や癌、心臓病、感染症、神経や免疫システムの疾患、老化に関連した変性状態の疾患などを研

究する。UKCMRI の規模は、1,250 人の研究者を含む 1,500 人の職員、年間予算は£1 億、初期投資が£6億、広さ 3.6 エーカー、建物面積 7,900 m²、2011 年着工、2015 建設終了予定となっている。

【MRC の関係 URL】

<http://www.mrc.ac.uk/Newspublications/News/MRC007559>

学術研究をビジネスに最大活用(ESRC)

11月10日、ESRCは、University of Cambridge と ESRC の支援によって the Centre for Business Research が実施した調査結果を発表した。それによると、産学連携で企業が焦点を当てているのは、技術的刷新よりも経営やビジネスの業績に関するものであることが分かった。高等教育機関や研究者と連携することで、自社のサービス向上や人事管

理、研修、マーケティング等にプラスになることを、多数の企業が望んでいることが明らかとなった。

【ESRC の関連 HP】

<http://www.esrc.ac.uk/ESRCInfoCentre/PO/releases/2010/november/business.aspx>

ノーベル賞受賞は、“英国経済に著しい効果をもたらすだろう”(EPSRC)

11月12日、EPSRCはProf.Andre Geimはラジオ番組に出演し、グラフィンの効果について語ったことを発表した。EPSRCは、2001年8月に£50万の支援をしたことがグラフィンの発見につながり、2009年10月には£500万以上の支援をこの素材の可能性に投資したとしている。Prof.GeimとNovoselov氏は発見されたグラフィンに非常に強く高い

伝導性と実用的な透過性を持つ極小のシートだとし、数々の実用的な応用を可能にしているとしている。

【EPSRCの関係URL】

<http://www.epsrc.ac.uk/newsevents/news/2010/Pages/fluorographene.aspx>

英印間で国際協力 インドの食に関連した健康問題(BBSRC)

11月26日、BBSRCは、BBSRC傘下のthe Institute of Food Researchが、インドの食物に関連した健康問題について、英印間で共同研究を実施することを発表した。研究対象の一例には、飽食や栄養不足、食物アレルギー、喘息などが挙げられている。

【BBSRCの関連URL】

<http://www.bbsrc.ac.uk/news/policy/2010/101126-n-india-partnering-award.aspx>

BBSRC研究者、日本との共同研究で受賞(BBSRC)

12月1日、BBSRCは、BBSRC所属の研究者2人が、2010年の大和エイドリアン賞を受賞したことを発表。大和日英基金による同賞は、王立協会の選考後、優れた成果を出した日英科学共同研究チームに授与される。

【BBSRCの関連URL】

<http://www.bbsrc.ac.uk/news/people-skills-training/2010/101201-n-collaborations-japan.aspx>

新しいパブリック・エンゲージメント(理解増進)の合意の発効(RCUK)

12月7日、RCUKは、高等教育と研究分野におけるすべての分野にパブリック・エンゲージメントが組み込まれることを目的とした新しい合意(Concordat for Engaging the Public with Research)を発効した。盛り込まれた4つの原則は以下のとおり。

- ・ 英国研究機関はパブリック・エンゲージメントに戦略的に関与する。
- ・ 研究者のパブリック・エンゲージメント活動への取組は認識・評価される。
- ・ 研究者は、適切な研修、支援、機会を通じてパブリック・エンゲージメントに参加できる。

・ 調印者及び支援者は、英国内における取組の進捗状況を定期的に見直していく。

この合意には王立工学アカデミーも署名しており、同旨の発表を行っている。

【RCUKの関係URL】

<http://www.rcuk.ac.uk/news/2010news/Pages/101207.aspx>

【王立工学アカデミーの関係URL】

<http://www.raeng.org.uk/news/releases/shownews.htm?NewsID=611>

Mr John Armitt, EPSRC 会長に再任(EPSRC)

12月10日、David Willetts 大学・科学担当大臣は、Mr John ArmittをEPSRCの会長に再任した。同氏がこのポストに初めて任命されたのは、2007年4月1日。今回の任期は2011年4月1日からの1年間となる予定。

【EPSRCの関係URL】

<http://www.epsrc.ac.uk/newsevents/news/2010/Pages/epsrcchair.aspx>

Research Council の予算発表(RCUK)

12月20日、David Willetts 大学・科学担当大臣は、Spending Review (歳出見直し) 期間(2011/12年～2014/15年)における7つのResearch Council(RC)の予算を発表した。これを受け、各RCは同期間の基本方針・政策を示すDelivery Planを発表した。予算は、2011/12年～2014/15年で総額約£112億なる。また、7つのRCの戦略的パートナーシップを担うRCUKは、各RCが総合的に英国の経済発展に重要な貢献をするための”Strategic Vision”を発表した。

【RCUKの関係URL】

<http://www.rcuk.ac.uk/news/2010news/Pages/101220.aspx>

【BISの関係URL】

<http://nds.coi.gov.uk/content/Detail.aspx?ReleaseID=417165&NewsAreaID=2>

※本件については、JSPS ロンドンのホームページでも詳細な情報提供をしております。

<http://www.jsps.org/information/documents/10/101223.pdf>

2. Royal Society の動向

科学が予想する将来—科学がどのように世界で最も大きな問題を解決するのかについて—の発刊について

11月30日、Royal Societyは、創立350周年を記念し、人類が直面している課題に対して、どのように科学が解決していくのかについて報告書を発表した。関連分野の科学者たちが解決方法について述べており、健康、環境、技術、宇宙などの科学的試みが行われている12分野を網羅している。

【Royal Societyの関係URL】

<http://royalsociety.org/news/science-sees-further/>

Sir Paul Nurse の就任

12月1日より、Sir Paul NurseがRoyal Societyの会長に就任した。Sir Nurseは遺伝学者で、前職はPresident of Rockefeller University及びDirector and Chief Executive of the UK Centre for Medical Research and Innovation。また、2001年のノーベル生理学医学賞受賞者。

【Royal Societyの関係URL】

<http://royalsociety.org/people/paul-nurse/?from=homefeaturefront>

3. Royal Academy of Engineering(RAE)の動向

包括的歳出見直しを受け、提言を発表

11月19日、RAEは、イギリスの研究への投資が、技術経済成長の源であり、価値ある高度技術ビジネスや将来の産業の基盤となる知識を提供する、という見解を示した。政府の重要優先課題のひとつである長期的経済成長のためには、それを促す研究基盤をいかに活用するかという考えに基づいて、政府助成金を配分すべきとしている。

2010年の歳出見直しの厳しい状況下においても、科学研究への助成金の配分が高かったことを歓迎した後、Director General Science and ResearchのAdrian Smith教授はこの科学研究予算の配分に関する声明を出した。要点は右のとおり。

- ・ RAEは、研究計画のバランスを考慮した上で、多くの投資を高度な研究へ配分することで、短中期的な経済利益をもたらす責任がある。
- ・ 富をもたらすビジネスを生むメカニズムが重要。
- ・ ビジネスや研究界における持続的知識基盤を発展・拡大させていくためには、高度な人材を維持することが不可欠であり、そのための研修や教育への予算配分は重要。

【RAEの関係URL】

<http://www.raeng.org.uk/news/releases/shownews.htm?NewsID=606>

2011 年から 2015 年までの研究補助金額が確定

12月21日、RAEは、2011年から2015年までの研究事業に対する政府助成金の交付を決定した。工学の研究は、経済状況の回復の原動力になるとしている。

- ・ 産業のニーズに合わせて、若手研究者や工学専攻の卒業生を社会に輩出していくため、リサーチフェローシップや客員研究員の支援を重点的に増加。
- ・ 工学研究施設や産業等との連携のもと、Leading Diversity in Engineering プログラムを立ちあげ、人員の不足の団体への支援拡大。
- ・ 教育的または公的活動を通じ、特に若い人々に対して、工学分野でのキャリアも含めた、社会の工学における価値を伝える。

- ・ 政府やその他の公共機関の政策立案に役立ち、独立的かつ権威ある提言ができるような、工学専門家のコミュニティの構築。
- ・ 新たに Engineering Enterprise Fellowship スキームを立ち上げ、起業精神のある若手研究者が、ビジネスを立ち上げ、研修を受けられるよう1年間支援する制度を設立。

【RAE の関係 URL】

<http://www.raeng.org.uk/news/releases/shownews.htm?NewsID=613>

4. British Academy の動向

高等教育財政が直面している変化

12月9日、British Academyは、高等教育財政が直面している変化についてプレスリリースを行った。発表によれば、政府が高等教育の財政に関する計画を発表して以来、授業料の大幅な値上げと人文・社会科学系への影響が問題となっている。特に以下の点において厳しい議論が必要とされている。①現状の大学財政制度は何年も満足のいくものではなく、結果的に自国や EU 諸国の学生の受入に制

限を課す結果となっていること、②前政権も現政権も高等教育予算の削減を約束しており、新しい計画は少なくとも追加的な収入をもたらすものであること。

【British Academy の関係 URL】

<http://www.britac.ac.uk/news/news.cfm/newsid/428>

人文・社会科学への助成拡大を歓迎

12月20日、British Academy の President を務める Sir Adam Roberts は、政府が人文・社会科学分野における学術研究への交付金を増やすとした本日の発表を歓迎した。同分野への研究交付金は現在 £2640 万(2010年-2011年)である。2011年から2015年までの4年間は、毎年£2700の助成金に加え、言語の研究や幅広い質的手法を用

いた社会科学分野の研究を援助するプログラムのため、新たに£500万が充てられる見込み。

【BA の関係 URL】

<http://www.britac.ac.uk/news/news.cfm/newsid/433>

III. 高等教育助成機関及び関連機関・団体の動向

1. イングランド高等教育財政会議(HEFCE: Higher Education Funding Council for England)の動向

Study of UK Online Learning (オンライン講座に関する情報提供の改善)

10月14日、HEFCEは、Lifelong learning team at the University of OxfordがHEFCEに提出した「Study of UK Online Learning」を公表した。本報告書は、大学やカレッジがオンライン講座に関する情報提供の改善点について調査したもの。

報告書では、機関はオンライン講座に対する幅広い情報

を提供し、正確な情報にアクセスできるよう改善すべきとしている。

【HEFCEの関係URL】

<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/oltf.htm>

試行的な調査が切り開く、英国の新しい研究評価の枠組みにおける主要要素の重要性

11月11日、HEFCEは、HEFCE研究評価の枠組みに関する報告書(Research Excellence Framework impact pilot exercise: Finding of the expert panels)を公表した。この報告書は研究の有益な効果を評価するため、画期的な提案を行った専門家の所見を打ち出している。

今回の試行的な調査では、①臨床医学、②物理学、③地球システム・環境科学、④社会事業・社会政策、⑤英語

・英文学、の5分野で行われた。29の英国機関が参加している。試行的調査では、上記研究分野における研究成果を評価することが可能だとわかったなどとしている。

【HEFCEの関係URL】

<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/refpilot.htm>

英国学生が海外留学で得るもの

11月18日、HEFCEは国際的な学生の流動性に関する報告書(International student mobility literature review)を発表した。報告書によると学生の海外経験は、学生の将来において成功する機会を拡大し、英国知識基盤経済に利

益をもたらすものとしている。

【HEFCEの関係URL】

<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/mobility.htm>

2011-12年の高等教育機関への補助金交付

12月20日、HEFCEは、BISより示された2011-12年の優先順位等を発表した。このレターは、初めて政府が財政について明確にしたものであり、包括的歳出見直し(Comprehensive Spending Review)やBrown卿の報告書を踏まえた対応について示している。

HEFCEは2011年1月28日に開催予定の会議においてBISからの指示を検討し、3月16日には各大学への配分額を公表予定。

主な内容としては、①2012/13年からの制度変更に備えた方針、②研究と経済的な成長;科学と研究に関する財源の保持、③財政と学生数;2011-12年 Teaching grantは2010-2011年と比較して6%減、2011-12年の Teaching capital(教育を実施するための資金)を約£9,600万減額し

他の重要分野へ振り分け、2012年以降の追加定員措置は行われない見込み、2011/12年は、各高等教育機関が定員を超過させないことを要望、④効率性と持続性;研究分野において、基本配分(Quality Related research funding)を2011-12年に£1,600万、2012-13年に£4,500万、2013-14年に£7,300万、2014-15年に£1億400万を節約し、QRに再投資、となっている。

【HEFCEの関係URL】

<http://www.hefce.ac.uk/news/hefce/2010/grant1112/>

※本件については、JSPS ロンドンのホームページでも詳細な情報提供をしております。

<http://www.jpsps.org/information/documents/10/101222.pdf>

2. 英国大学協会(UUK: Universities UK)の動向

高等教育機関の予算削減は逆効果—UUK の提言

10月7日、UUKは10月20日に公表される2011年の歳出計画(Spending Review)に対して、大学が将来的な英国の経済成長を支援する重要な役割を担っている趣旨の提案を発表した。

主な内容は以下の通り。

- ・ 将来的な英国の経済成長は、堅固な研究基盤と高レベルの労働力に拠る
- ・ 歳出計画における投資の削減は、2014-15年までの政府の財政赤字削減計画に悪影響を及ぼす
- ・ 大学における公的投資は、民間(個人)の財源を活用

し、民間部門でのイノベーションと成長は重要

- ・ 支出削減は、学生の生活や社会的流動性の機会に悪影響を及ぼすだけでなく、ヘルスケアや学校教育など最前線のサービスにも影響を及ぼす

【UUK の関係 URL】

<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Media-Releases/Pages/Cutstohighereducationbudgetcounterproductive%e2%80%93UUKspendingreviewsubmission.aspx>

UUK が公表したパートタイム学生に関する報告書

10月26日、UUKは英国におけるパートタイム学生の供給について報告書(The supply of part-time higher education in the UK)を公表した。

主な内容は以下のとおり

- ・ 現行では財政的に不利な機関がパートタイムコースを開設し、追加的なコストやパートタイムコースを実施することに伴うリスクに対し、十分にカバーできていない。
- ・ Brown 卿の報告書を受けて、全日制学生の学費は増加する見込み、大学は学費上昇への圧力の下で、現在入学時に学費を支払っているパートタイム学生にも(財

政的な)負担増加を課す見込み。

- ・ 現在のパートタイム学生の10%が学費等にかかる政府の財政的支援を受けている。Brown 卿の提案が導入されれば、政府の支援を受けられる学生は大幅に増える見込み。

【UUK の関係 URL】

<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Media-Releases/Pages/Part-timestudycouldgrowfollowinguniversityfundingproposals%e2%80%93UUKreport.aspx>

英国の大学と発展途上国との協働

11月12日、UUKは英国の大学が発展途上国と協力において果たしている重要な役割が増加していることについて実例をまとめた報告書(Universities and development: global cooperation)を公表した。近年、世界銀行や国連などと協力する高等教育の重要性が認識されており、この報告書では、The Malawi Millennium Project, University of

Strathclyde の事例などが取り上げられている。

【UUK の関係 URL】

<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Media-Releases/Pages/UKuniversitiesworkingcloselywithdevelopingcountries.aspx>

President Steve Smith、UUK が発した現在の高等教育改革に関する警鐘

11月25日、President Steve Smithは、UUKの財政に関する討論会において、政治家たちが学費に関する法案を可決できない場合は、大学や学生数に対して打撃を与えるという警告を発した。President Steve Smithは、経済状況は、卒業生の貢献(graduate contribution)の増加と学生削減という受け入れがたい選択肢を突きつけているとしている。UUKは、Brown 卿の報告書や Spending Review が示す高

等教育予算の削減には反対し続けているが、それでも我々が政府の提案に賛成するのは、高等教育への長期間に渡る公的支援の関与があるからだとしている。

【UUK の関係 URL】

<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Media-Releases/Pages/FundingDebateSpeech.aspx>

スミス会長の講演内容前文は右記の URL に掲載されています。

<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Speeches/Pages/ProfessorSteveSmith'sspeechforUUKfundingdebate.aspx>

高等教育機関が担う経済を活性化させるための重要な役割についての報告書

12月1日、UUKは高等教育機関が経済を活性化させるために重要な役割を担うことについての報告書(Creating Prosperity: the role of higher education in driving the UK's creative economy)を公表した。主な内容は以下の通り。

- ・STEM科目と創造性は密接不可分。経済活動を支援する科目は優先順位を高く位置づけられる必要があり、ポスト Brown 報告書として指導のための公的財政支援を引き付ける必要がある。
- ・イノベーションは、将来的な経済活動の成長に重要な役

割を果たす。求められているのは、あらゆる研究分野で働き、現状の実務をこなし、新しい解決方法や機会を生み出すことができる高い能力をもった人材である。高等教育は当該分野において中心的な役割を担っている。

【UUK の関係 URL】

<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Media-Releases/Pages/Universities'vitalroleinthecreativeeconomyUUKreport.aspx>

3. 高等教育統計局(HESA: Higher Education Statistics Agency)の動向

英国高等教育統計 2008/09 の公表

9月23日、HESAは英国高等教育統計 2008/09を発表した。5年前のデータと比較して、明らかに高等教育機関在籍者は増加している。

出身別学生数

	2004/05	2008/09	増減率(%)
総学生数	2,236,270	2,396,055	7%
学部生	1,753,930	1,859,240	6%
英国人学生	1,601,465	1,673,655	5%
英国人以外の学生	152,465	185,585	22%
大学院生	482,335	536,815	11%
英国人学生	337,685	353,430	5%
英国人以外の学生	144,655	183,385	27%

職員数

	2004/05	2008/09	増減率(%)
総職員数	346,305	382,760	11%
教員	160,655	179,040	11%
教員以外の職員数	185,650	203,720	10%
管理担当者、技官等	74,520	86,920	17%
事務職員	66,115	72,310	9%
マニュアル担当職員(設備担当)	45,010	44,490	-1%

英国高等教育機関の支出と収入(単位: £ 百万)

	2004/05	2008/09
総収入	18,141	25,373
総支出	17,976	24,944

【HESA の関係 URL】

<http://www.hesa.ac.uk/index.php/content/view/1891/161/>

高等教育機関のベンチマークに関する報告書

11月4日、HESAは、HEFCEから委託を受けて実施した。高等教育機関のベンチマークに関する報告書「Benchmarking to improve efficiency-Status Report」を公表した。HESAは、高等教育分野横断に特に効率性の推進に特化したベンチマークに関して、統合する活動を行っている。この調査では、最初の段階として、ベンチマーク作成のために他機関の実例などの情報や利用可能なデータベース、サービスなどを収集し、分野横断的なベンチマーク

の基準となるものを作成するなど、段階的に検討を進める。今後は他機関と協力しながらベンチマークの効率性等を検討する。

【HESA の関係 URL】

http://www.hesa.ac.uk/dox/Benchmarking_to_improve_efficiency_Nov2010.pdf

4. その他機関の動向

Sutton Trust の動向について—学費の上昇が及ぼす影響についての報告書 (Increasing university income from home and overseas students: what impact for social mobility)

10月4日、Sutton Trust(特権を持たない若者にも大学進学に関する平等な機会の拡大と社会的流動性の推進を目的とする団体)が学費の上昇がどのような影響を及ぼすかについての報告書 (Increasing university income from home and overseas students: what impact for social mobility) を公表した。報告書では、学費が自由化されれば、現在の5倍相当の学費になることが予想され、大学としても収入源とな

る留学生獲得に焦点を当てることで国内の学生の育成に影響がでるとした。

【Sutton Trust の関係 URL】

<http://www.suttontrust.com/news/news/student-fees-could-increase-five-fold/>

UCAS の動向について—高等教育機関の入学状況に関する報告書


11月16日、UCASは高等教育機関に入学状況を分析した報告書 (Provisional End of Cycle 2009/2010) を公表した。報告書では、進学希望者は増加しているにもかかわらず、入学者数は変化しておらず、入学率は昨年の75.3%から70%に減少している。200,000以上の生徒が入学できず、これら生徒のうち、94,000名以上がすべての希望を拒否さ


れたか、もしくは自発的に進学希望を取り下げる結果となったとしている。

【UCAS の関係 URL】

http://ucas.com/about_us/media_enquiries/media_releases/2010/161110

5. 大学等研究機関の紹介

Aston University							
基本データ	設立	教員数	学生数		留学生数	The Times Good University Guide 2011	RAE2008
			学部生	大学院生			
	1966年	約630人	7,235人	1,855人	20.1%	29位	52位
URL	http://www1.aston.ac.uk/						
特徴	<ul style="list-style-type: none"> 就職率の高さで有名である。2007年、2008年度の大学院卒業生の卒業後半年以内の就職率は82%であり、英国平均の70%を大きく上回っている。 サンドウィッチコースを採用しており、これが高い就職率の大きな一因となっている。 産業界、商業界と強い結びつきがあり、多くの資金を集めている。 学生は社会的に多様であり、89%が公立高校出身、3分の1の学生がワーキングクラスの出身である。 						

The University of Nottingham							
基本データ	設立	教員数	学生数		留学生数	The Times Good University Guide 2011	RAE2008
			学部生	大学院生			
	1881年	約3,145人	21,710人	6,235人	15.0%	20位	24位
URL	http://www.nottingham.ac.uk/						
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ラッセルグループのメンバーである。 Times Higher Education World University Rankings 2010-2011、174位 ノーベル賞受賞者を2人輩出している。 中国、マレーシアにもキャンパスがあり、7,500人の学生が在籍している。それぞれのキャンパスの学生たちには、他のキャンパスで単位を取得できるコースが提供されている。 2010年度は出願率が13%上昇し、英国大学内でもとても高い上昇率となった。 教育が充実しており、QAAの評価では39教科において24段階中22以上のスコアを記録した。 						

University of Liverpool							
基本データ	設立	教員数	学生数		留学生数	The Times Good University Guide 2011	RAE2008
			学部生	大学院生			
	1881年	約2,115人	13,480人	2,150人	9.1%	28位	40位
URL	http://www.liv.ac.uk/						
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ラッセルグループのメンバーである。 Times Higher Education World University Rankings 2010-2011、165位 ノーベル賞受賞者を8人輩出している。 経営学、法学、薬学、工学、獣医学、世界級の研究拠点を設立するために£50mの資金を投入している。 2010年度は出願率が12%上昇した。 2008年 Research Assessment Exercise では半数以上が世界級、または国際的に優秀との評価を受け、特にコンピューターサイエンス、物質学、建築学、英語学、歴史学の分野に置いて高い評価を受けた。 中国の Xi'an Jiaotong University と共同で中国の Suzhou (蘇州) に大学を開いた。これにより、University of Liverpool の学生が Suzhou Industrial Park で職業体験が出来る一方、中国人留学生は後期課程を University of Liverpool で学ぶことが出来るようになった。 						

※学生数および留学生数は、The Times Good University Guide 2011 を参照。

●業務日程

10月

- 1日 日欧産業協力センター市岡プロジェクトマネージャー(J-BILAT 担当) 来訪(平松、関口、疋田)
- 4日 理化学研究所・University of Liverpool 協定調印式および講演会出席(平松、関口、Watson、吉川)
- 5日 University of Liverpool 事業説明会開催(平松、関口、Watson、吉川)
- 6日 理化学研究所野依理事長一行来訪(平松、関口)
- 7日 タイ・ラオス・中国出張(～19日)(平松)
JETRO 法務・労務セミナー出席(於 JETRO ロンドン)(関口)
- 8日 在英日本人研究者登録ページ打合せ(関口、多田)
- 14日 JSPS ロンドン・JETRO ロンドン共催会議打合せ(於 JETRO ロンドン)(関口、多田)
University of Glasgow 合同説明会(関口、Watson)
- 18日 JETRO セミナー出席(於 JETRO ロンドン)(関口)
- 20日 マンチェスター大学往訪、打合せ(平松)
外国人特別研究員・外国人招へい研究者プレデパーチャーセミナーおよび同窓会イベント(全員)
- 21日 UCL 大沼教授往訪、JSPS ロンドン・JETRO ロンドン共催会議打合せ(於 UCL)(関口)
- 22日 University of Southampton 事業説明会(平松、Watson、多田)
- 25日 在英日本人研究者登録ページ打合せ(関口、多田)
Great Britain Sasakawa Foundation 来訪(Watson)

- 26日 The Royal Society との打合せ(平松、関口、Watson)
- 27日 The University of Nottingham Malaysia Campus 10th Anniversary Dinner 出席(平松)
- 28日 日英シンポジウム開催スキーム募集開始
- 29日 在英日本人研究者登録ページ打合せ(関口、多田)

11月

- 2日 京都大学産官学連携欧州事務所野村所長来訪(平松)
大学評価・学位授与機構川口特任教授、古川客員教授等と打合せ(平松、関口、疋田)
- 4日 JICA 英国事務所 神所長来訪(平松)
- 5日 The 2010 Toshiba Lectures in Japanese Art 出席(於 The British Museum)(平松)
- 8日 フランス出張(～10日)(平松)
[9日 JSPS ストラスブール研究連絡センター訪問、セミナー講演]
- 15日 BBC 2020 Panel 収録(於 The Music Room, Killik & Co Head Office)(平松)
- 17日 Imperial College London 往訪(奈良先端科学技術大学院大学調査訪問随員)(吉川)
University of York 事業説明会(平松、関口、Watson、横山)
- 18日 University of Nottingham 事業説明会(平松、関口、Watson、横山)
- 19日 奈良先端科学技術大学院大学一行来訪(関口、吉川)
在英日本人研究者登録ページ公開
- 22日 Ken Arnold, The Head of Public Programmes/ Rosie Tooby, Wellcome Trust 往訪(平松、関口)
Newcastle University 中川教授往訪、調査(横山)
- 23日 UCL 大沼教授来訪、JSPS ロンドン・JETRO ロンドン共催会議打合せ(平松、関口)
- 24日 在英日本人研究者登録ページサインオフミーティング(関口、多田)
JST パリ事務所荒川所長来訪(関口、疋田)
フランス出張(～27日)(平松)
- 25日 JETRO テクノロジーセミナー出席、事業紹介ブース出展(於 Loughborough University)(関口、多田)
- 26日 政府系法人勉強会出席(於 JETRO ロンドン事務所)(関口)
- 29日 Japan Arena 会議出席(於 Arup)(平松)
UK-Canada Rutherford Lecture 出席(於 Royal Society)(平松)
Asian Studies Centre Seminar 出席(於 University of Cambridge)(多田、横山、吉川)
- 30日 広島大学 産学・地域連携センター末次教授・理事、折戸准教授、菅 Professor for Special Assignment(欧州駐在)来訪(平松、関口)

12月

- 1日 慶應義塾大学阿川常任理事(国際担当副学長)来訪(平松)
外国人特別研究員(欧米短期)募集締切
- 2日 Daiwa Adrian Prizes for UK-Japan scientific collaboration 出席(於 Royal Society)(平松)
The Celebrate the Birthday of His Majesty The Emperor of Japan 出席(於在英日本大使館)(平松)
University of York 往訪、調査(横山)
- 3日 東北大学教育・学生支援部白崎学生支援課長ほか職員 5 名来訪(平松、関口)
立命館大学石野国際部国際企画課課長(G30 プロジェクト・マネージャー)、坂本英国事務所海外プログラム & PR コーディネーター来訪(平松、関口)
Dr Cox, University of Manchester との打合せ(平松)
- 4日 スウェーデン出張(～12日)(疋田)
- 6日 Daiwa Foundation 小川プログラム・ディレクター来訪(平松)
- 7日 広報連絡会議(於 NAASH ロンドン)(平松)

- 8日 広島大学岡本理事・副学長(社会連携・広報・情報担当)、佐藤国際センター長ほか国際センター職員2名来訪(平松、関口)
ブリティッシュ・カウンシル Alison Beale 駐日副代表、田中教育推進・連携部長来訪(平松、関口)
- 9日 JSPS ロンドン・JETRO ロンドン共催会議打合せ(関口)
日本クラブ年次総会出席(於日本クラブ)(平松)
- 15日 オランダ・ドイツ出張(～18日)(平松)
[17日 JSPS ボン研究連絡センター往訪]
Aston University 事業説明会(関口、Watson、吉川)
- 20日 MEXT 金城氏、梅田氏来訪(平松、関口、疋田)
- 21日 京都大学産官学連携欧州事務所往訪(平松)
在英日本人研究者登録ページ修正打合せ(関口、多田)

大寒波の影響

LIFE IN LONDON

英国では今年、11月中旬頃から一気に寒くなり、ここ、ロンドンでも雪が積りました。生まれも育ちも大阪の私にとって、11月に雪を見るのは生まれて初めて。雪化粧したロンドンの街にうっとりしていました。

しかし、浮かれていられたのは最初だけでした。

まず、12月1日に申請締切のフェローシップに関して、「積雪のために郵送業者が集荷に来れず、申請締切日に間に合わない！」とのお問い合わせがありました。大雪が積もったヨークからでした。

センターで発注していたクリスマスカードは、予定より2週間も遅れて届きました。

それから、12月中旬にやってきた大寒波では、交通機関の大きな乱れが報道された通りです。欧州最大のハブ空港であるロンドンのヒースロー空港は1週間近くキャンセルが続く大混乱となりました。パリ等の欧州大陸の都市とロンドンを結ぶユーロスターも、通常の何倍も時間がかかり、欠便が相次ぎました。ちょうどクリスマス休暇前で、クリスマスを家族と過ごすことを大切にしているこちらの人々が帰省する時期に重なり、大変な事態となりました。

私も例にもれず、この交通大混乱に巻き込まれました。12月第3週目の週末に、ドイツのクリスマスマーケットを見に行く予定でした。運良く(とこの時は思った)、行きのフライト

は発ち、ドイツの数々のクリスマスマーケットを堪能することができました。しかし、帰国便の数時間前から雪が非常に激しくなりました。用心深く(?)、早めに空港に向かい、チェックインも済ませ、ほっと一息、レストランに入ったところでアナウンスが流れました。「本日はこの空港からの全ての便がキャンセル。」

翌日もなお、雪の影響でフライトのキャンセルが相次ぐ中、今度は本当に運良く、定刻にロンドンに到着しました。乗客からは拍手が起こり、喜びを分かち合いました。

雪景色は素敵だけれど、フライトのキャンセルは二度といたらないと思った、2010年ヨーロッパの冬でした。



ドイツのクリスマスマーケットで大雪

(多田)

●旧 JSPS ロンドンスタッフの来訪

<前 JSPS ロンドンセンター長>

- 大学評価・学位授与機構 古川祐子客員教授

<元 JSPS ロンドン国際協力員>

- 広島大学 平野裕次氏
- 大学評価・学位授与機構 小西晴奈氏
- 東北大学 島宏幸氏

監 修：平松 幸三（JSPS ロンドンセンター長）
編集長：関口 健（JSPS ロンドン副センター長）
編集担当：多田 里奈、吉川 かおり（JSPS ロンドン国際協力員）